

合唱団お江戸コラリアーズ 小演奏会 お江戸の実証実験 ～ここからはじまる～

当初8月10日に埼玉のウェスタ川越大ホールで予定していた演奏会が延期となり、コロナ禍での演奏会開催を模索した結果、大幅な規模縮小と会場を変更して8月16日にミニコンサートを八王子市芸術文化会館いちようホールにおいて実証実験の開催に漕ぎつきました。

新型コロナウイルス感染症対策のためのさまざまな模索がはじまるとの思いから、タイトル「～ここからはじまる～」が付けられました。諸般の事情からオンステメンバーは半分の35人ほどに縮小。三密を避けた感染予防策を講じ、マスクをして歌ったらどうなるか、802席の会場を16%の130席に絞り、全席指定500円、オンラインでの前売りのみ、当日券はなしという方法で開催しました。



「今回の演奏会は、コロナ禍におけるアマチュアによる演奏会開催の実証実験として、ホール側と協議を重ね、最善の準備をして臨みました。

個々の状況により活動を自粛している団員や、都内から離れている団員もいるため、平時の半分のオンステです。ステージ上の演奏者間には十分な距離を設けます。演奏の質に影響が出る可能性が懸念されます。通常の演奏会では休憩を設けない程度の曲数ですが、今回は15分間の休憩時間を設け、場内の換気を行います。」と、主催者は万全の態勢で臨んでいました。

可能な限りの感染防止対策



入場の際、入口で手指を消毒、非接触体温計による検温、受付では自らチケット半券を切り取り所定の箱へ投入します。プログラムも八ガキサイズのシンプルなもの座席の背もたれに留めてありました。物販なし、贈り物の受け取りはせず、客席内での会話は控え、声援・ブラヴォーの掛け声・歌唱も禁止と、ないないづくしのコン

サートでした。

終演後は、会場を前から三つに区切り、案内に従って出口に近い座席から順番に退出、所要時間の計測も実験のうちでした。ロビーでのあいさつなどもなし、録音・ビデオ撮影はあくまで実験データとして、後日公開します。いちようホールは、厚労省の新型コロナウイルス接触確認アプリ(COCCA)に対応しているため、インストールすることを推奨していました。



↑座席に貼られたプログラム

←合唱団とピアニストの間にシールドを設置

2 ステ・全 9 曲のミニコンサート

第 1 ステージは「ペガサス幻想」「The turtle dove」「Didn't My Lord Deliver Daniel」「Psaume 121」「斎太郎節」の 5 曲、15 分の休憩のあと第 2 ステージはすべてピアノ曲のため、ピアニストはフェイスシールドを外した素面で登場。「ワクワク」「群青」「虹」「くちびるに歌を」の 4 曲が演



奏されました。そしてアンコールにはコンサートのタイトルともなった「[ここからはじまる](#)」が歌われ熱い拍手のみに包まれて終演となりました。

ステージは客席と十分な距離をとるため、前方の数列をつぶして広げてありました。↓

今回は東京都合唱連盟から理事長はじめ何人かの方々が視察にいられていました。今後予定されているガイドライン作りの参考になることを願います。



終演後のあいさつで指揮者の山脇卓

也さんは、聴衆に向かい「今回は実証実験ですので、後日新型コロナウイルスに感染したことが判明した場合は、このコンサートに参加したことをはっきり申し出てほしい」と述べられました。つまり、現在考えられる限りの対策をとった実証実験でたとえ感染者が出てたとしても、それは将来に向けての貴重なデータになるということです。実験にはネガティブデータの積み重ねが重要との認識だと思えます。

このようなチャレンジの積み重ねで一步ずつ前へ進むしかないでしょう。

やはりマスクは楽じゃない…

合唱団、指揮者とも全員何らかのマスクを着用していたことはいまでもありません。現在市販されていて入手可能なマスクが勢揃いしたような感じです。ただし、ピアニストだけはフェイスシールドを着用していましたが、声を出すわけではないので理にかなっているといえます。

やや気になるのは、やはり歌っているうちにマスクがズレてしまうので手で頻りに直す人がいたことですが、その点**東混マスク**の人はしっかりフィットして使いやすいそうでした。マスクがズレるのはかなり気が散ると思いますし、聴衆も余計なことが心配になりますし、ビジュアル的にもよろしくありません。

ステージの前半と後半でマスクを変えて試している人も何人かおり、実際に本番で何曲か歌ってみたいと分からないので比較検証したものです。因みに、声楽家の**西尾岳史**さんが最近行った比較実験によると、歌いやすい順に①東混マスク、②ウレタンマスク、③マウスシールド、④不織布マスク、⑤手作り布マスク、⑥アベノマスク、⑦フェイスシールドとなっていました。如何でしょうか。

実際にステージで歌ったメンバーの**武部幸生**さんの体験談は次のようでした。

「マスクは前半と後半でお色直してみた。前半はマスクの中にフレームを付けて空間を作るタイプで、母音をどう響かせるか。後半は日本語曲でしたが、子音が飛ばないとリハで指揮者の指摘があったので、東混マスクで歌ってみた。口まわりが自由なので、子音が発音しやすいというのが個人的な見解です。楽屋ではマスクはキツイという声の主におじさん団員から出ていた。」

同じく**小沼達也**さんは「東混マスクは、通常のマスクよりは歌いやすかったが、子音を大きめにしないと言葉が届かないような気がした。また、長く歌っていると熱がこもり、汗をかけた。観客が少ないので、開演前や休憩時にシーンとしているのが不思議でした。また、観客もマスクをしているので表情がみえず、反応が分かりにくかった。しかし、今の時期、観客の前で歌うことができ幸せでした。」と実証実験がスムーズに実施できた喜びを噛みしめていました。

今回の聴衆は実験の立会者でもあるという位置付けです。洋光台男声合唱団の**瀬野俊樹**さんの「一曲一曲歌う喜びを噛みしめながら歌っているなと感じました。」という感想は、おそらく当日のすべての聴衆に共通するものだったと思います。

(大部分の写真はお江コラさんからお借りました。)